

総括—見え難くなっている領域を調査すること

川端 浩平

報告では、国内外の外国人住民、地方都市の若者、野宿者、アニメファンやパフォーマー、まちづくりに取り組む人びとなど、フィールド調査に基づいた多様な事例から移動と定住をめぐる様々な力学や思惑が働いていること、そして一つの方向性——例えばプロ・グローバリゼーションなのか／アンチ・グローバリゼーション、あるいは均質的なものに対する固有なものへの立ち上げといった一般的な議論——には回収することのできない帰属意識が営まれていることや様々な次元における出会いが明らかになった。

そのような五つの異なったフィールドで調査する登壇者には、以下の二つの共通のテーマを前提に報告してもらった。一つ目は、諸個人の帰属や地域のアイデンティティが、資本や行政による取り組みによって圧倒的な影響を受ける、あるいは可視化されている状況をどのように考えるのか。二つ目は、流動性の高まりによる新たな出会い、その出会いから生まれる可能性やコンフリクトにはどのようなものがあるのか。

まず一つ目の問いに関しては、そのような可視化に対して、不可視化される領域を調査する必要性が提起された。例えば、轡田竜蔵の報告の事例では、「包摂」と「排除」のあいだを生きる地方都市の非選抜型X大学出身の若者たちが放っている「どうしようもなさ」のようなもの、あるいは調査者にそのように映ってしまう人びとの持つ独特の「迫力」を描き出すようなアプローチや記述について考えるヒントがあるように思われた。それは、稲津秀樹の報告で述べてられていた調査方法や調査者のフィールドや対象者への目的やコミットメントの問題と関連しているように思えた。これは一方で調査方法の問題であり、もう一方で主体と政治性をめぐる問題ともむすびついている。つまり、ときには特定の主体を「可視化」させ、あるときには「不可視化」させる、このような力学に着目することによって、この対立のいずれかにコミットしてしまうことによって見え難くなっている様々な実践や帰結が存在していることを捉える可能性が示された。

二つ目の問いについては、谷村要の報告におけるネットコミュニティを介したアニメファンと行政・商店街・地域住民との出会いに関する事例を通じて確認された。つまり両者のニーズはマッチしているように思えるのだが、谷村が懸念を示したように、地域コミュニティやアイデンティティといったものを外部の眼差しを再帰的に（あるいは内発的に）形成していくのかには疑問が残る部分もある。そしてどこか、地域住民が置き去りにされている印象も拭えない。例えばまちづくりゆえに地方自治体の財政が悪化した場合を想像してみると、地方自治体や商店街（それにカラム政治家）と地域住民とのあいだのコンフリクトを引き起こし、そこに関わっていたアニメファンは郊外型のショッピングモールのようにスクラップ&ビルド的にいなくなってしまうのではないかと。そう考えてみると、ハード面ではなく地域のイメージというソフト面という違いをのぞけばかつての一村一品運動的

な村おこしとほとんど変わらない取り組みのようにも思える。つまり外部との出会いには非対称的な側面があり、地域社会における保守体制派の利益と挫折に結びついただけではないか。一つめの問いである、不可視ということと結びつけてみると、そもそも旧来的なローカル権力対地域住民という対立の再構築が隠されている、あるいは問われていないということもまた問題だということが見えてくる。

このような文脈においては、例えば安達智史の報告にあったイギリスのムスリムの若者の事例では、帰属意識をめぐる問いは、社会問題ではなく、個人の責任によるマネジメントに帰するものとなってしまうかもしれない。また、山北輝裕のホームレスの事例からも、グローバリゼーションの均質性に対するローカルな固有性という図式においては、ホームレスという存在の排除を前提に成り立っているのではないか、政府の諸施策やまちづくりの結果そのような事態が諸地域で進行していることもまた事実ではないかと考えざるを得ない。

つまり五名のそれぞれ異なる事例報告は、グローバルな問題の前景化（つまり可視化）に対して不可視化されている領域を確認するとともに、その二項対立的な問いの設定そのものが帰属の意識の多様なあり方や個別性を不可視化していることを前提にして成り立ってしまうという問題を提起しているように思える。そしてこの対立によって見え難くなる部分に介入していくような研究調査が、様々な事例研究をつなげていくことによって見えていく可能性が生まれるのではないか。ただ、これらの様々な事例を結びつけてひとまとめにするのはとても難しく、それぞれをいかに繋げて考えていくか、ということが今後の課題である。